

言語の表現と意味について

矢 田 武

我々が何かについて話したり、書いたりする場合、通常は、その何かについて「思っていること」をそのまま言葉に移し換えているように思える。しかし、我々は言葉を話すそのときどこにおいて、何かしらの「もどかしさ」や「曖昧さ」を感じることがある。また、我々の言葉は、いつのまにか自分自身が言い表したいと思ったことを越えていたり、少なかつたりする。これに類する経験としては、小説や、特に詩に於いて、そこに置かれた言葉以上のものを我々が読み取ってしまうような場合が挙げられるだろう。

我々の言語は、単純に、常に不変の意味内容を受け渡すだけの道具ではないように思える。我々の言語表現と、その「意味」とはどのような関係にあるのだろうか。このことを考えるために、「言語は形態であって、実体ではない」とするソシュールの言語学と、「言語表現は、われわれにとって思考そのもの」であるというメルロ・ポンティの言語論、このふたつをみていきたいと思う。

言語記号の性質

フェルディナン・ド・ソシュール(1857~1913)は言語を一枚の紙に比して次のように語っている。「言語はまた、一葉の紙片に比べることができる―思想は表であり、音は裏である…裏を分断せずに

表を分断することはできない…おなじく言語においても、音を思想から切り離すことも、思想を音から切り離すことも、できない（中略）それゆえ言語学のしごと場は、二つの秩序の要素が結合する境界地域である…この結合は形態をうみ、実体をうみはしない。」

ソシユールがここで示しているのは、ひとつには、言語の表示的側面であるシニフィアン（signifiant）と、同じく観念的側面であるシニフィエ（signifié）とが、シーニュ（signe）というひとつの言語記号全体の中で表現と意味という二項として対置されつつも、全体を構成するものとして分かち難く結合されている、ということである。それと同時に、この結合は実体ではなく、形態をうむのであり、このことは、ソシユールが第一原理であるとする「言語記号は恣意的である」という記号の性質をあらわしている。

言語について素朴に考えるとき、我々は何かある対象物が先にあり、そのものの名前として言語がつくられ、機能しているように感じる。しかし、ソシユールの考えでは、「言語記号が結ぶのは、ものと名前ではなくて、概念と聴覚映像」²なのである。そしてこの言語記号が、それ自身を成立せしめるような如何なる実体ももたないということは、言語記号の恣意的性質とふかく関わっている。

ソシユールが指定する記号の恣意性（arbitraire）は、二重になっている。

第一には、シニフィアンとシニフィエの結合の仕方に於ける恣意性である。或る語が担う観念的側面は、その聴覚映像との結合に於いて必然性をもっていない。このことが示すのは、或る語が他の言語に翻訳されることや、或る事物に与えられる表現としての記号は偶然的なできごとであって、その事物がどのように呼ばれることも可能であったということではない。

そこで、恣意性の原理を示すために、ソシユールは「無縁」（immune）という言葉を用いている。つまり一個のシーニュの内側では、表示と観念に相当するシニフィアンとシニフィエとが結合されて

いるわけだが、そこには自然的な連結というものが見出だされないということなのである。ここに日本語で〈犬〉という語で表されている動物の觀念があるとする。いま我々が考えようとしている恣意性は、その動物の觀念を他の国語(dog・chien etc.)や自分勝手につくった表記を用いることによって変更可能であるということではない。ソシュールが注目するのは、〈犬〉という語に与えられている觀念(シニフィエ)と〈犬〉という聴覚映像(シニフィアン)との間に、何ら論理的必然性が介在しないという点である。

確かにこのような言語記号の恣意的性質は、シニフィアンとシニフィエの結合について、自由な選択、変更を予想させるものである。ところが実際には、我々の実感が教えているように、既に機能している記号について、その表示を差し替えるという作業は簡単に行われるものではない。我々の言語は社会的な産物であり、しかもそれは常に先行する時代の遺産として受け継がれている。ソシュールは言語を社会的制度であると認め、言語がそのようにして確立された場合、その恣意的性質は、大衆や個人による言語の改変に関する自由な選択を認めるよりも、強制的に制度の行使を強いるように働くという。それはつまり、先行する時代の遺産を變革することよりも、もともと論理的結合をもたない記号をわざわざ變革する必然性のなさを選擇させるということなのである。こうして言語は我々の意思によって自由に変更されない、固定的なものとなるのである。

「恣意的制約、その力で選擇は自由である、および時間、そのおかげで選擇は固定される。記号が伝統の法則において他に法則を知らないのは、ほかでもない、記号が恣意的であるからであり、またそれが恣意的でありうるのは、それが伝統にもとづくからである。」³

しかし同時に、言語の恣意的性質は時間のなかでまったく逆のことをも惹き起こす。言語は我々が既に知っている通り、變遷を繰り返しているが、この變遷の要因となっているのもまたシニフィアン

とシニフィエの間に必然的な絆をもたないという記号の性質なのである。この非論理的結合は、時間の流れと共に起こる、偶然的なさまざまな言語への干渉を拒絶する力をもっていない。

「いかなる言語も、所記・能記の関係をのべつにずらす要因に立ちむかつては、まるで無力である。これは記号の恣意性からの帰結の一つである。」⁴

このときの記号の変遷は、単にシニフィアンもしくはシニフィエが、個別にもしくは同時に変化を受けたということよりも、この両者の関係のずれに注目すべきであろう。記号の恣意的性質ゆえに変容したシーニュというものは、そこに含まれていた二項がずれただけというのではなく、シーニュが言語体系のなかでもっていた価値自体が変化するのである。この「価値」のずれが第二の恣意性に直接かかわってくるのである。

ここまでで述べてきた記号の恣意性とは、一個の記号の内部において見出だされる恣意性であった。これに対して、第二の恣意性として、より重要なものが、一個の記号ではなく、言語体系内にある記号としての、記号間に於ける恣意性である。

この記号間の恣意性は、ソシュールが「言語学の独自・真正の対象」として位置付けているラングの性質に関わっている。ソシュールは言語活動の研究に於いて次のようにふたつの部門を挙げている。「一は、本質的なもので、その対象は言語である、これは本質において社会的であり、個人とは独立のものである…この研究はもっぱら心的である…他は二次的なもので、その対象は言語活動の個人的な部分、すなわち発声をも含めた言である…これは精神物理的である。」⁵

ここでソシュールは、前者をラングの言語学、後者をパロールの言語学と考えることができる。ラングは、社会的な制度として成立し、個人による自由な変更を許すものではない。しかし、ここ

で最も重要なのは、ラングが様々な規則や個々の言語記号といったものをすべて含みながら、その裏側には実体的なものももっていないということであり、同時にそれは体系として存在しているということである。つまり、ここで考えられているラングとは、一つ一つの規則・言語記号が、我々の外側、言語外の現実の事物に対する正確な対応表のようなものではないということである。我々の言語の内には「予定観念などというものはなく、言語が現われないうちは、なに一つ分明なものはない」のである。

従って言語のなかにあるのは、それ自体が始めから存在しているような実体に基礎をおくものではなく、他の諸項との関係によって、他のもの「ではない」ということによってしか定義づけられないような価値をもつものである。つまりソシユールは「言語には差異しかない」というのであり、しかもそれは「積極的辞項のない差異」だというのである。

「言語がふくむのは、言語体系に先立って存在するような観念でも音でもなくて、ただこの体系から生じる概念的差異と音的差異とだけである。一個の記号のうちにどのような観念または音的資料があるかということは、それがどのようなぐあいに他の記号に取りかこまれているかということに比べて、あまり重要でない。その証拠には、辞項の価値は、ひとが意味にも音にも触れることなしに、たんにそれに隣りした他のなにがしの辞項が変更をうけたということだけで、変更しうるのである。」

ここで我々は言語記号の価値について考えることになる。我々の言語記号は、実体ではなく、記号間の差異に支えられ、それゆえ、そこで始めて固有の価値をもつのである。そして、この記号間の差異を決定するに至るその契機、つまり体系から或る記号を切り取るその仕方は、恣意的である。言語記号の記号間における恣意性は、言語記号の価値創造に関わっているのである。

ソシユールが提示する「価値」は、それが示差的存在であるがゆえに価値をもつものである。それを実

際に示差的なものとして機能させるのが、記号の表現的側面であるシニフィアンである。しかも「語において重要なものは、音そのものではなくて、その語を他のすべての語から区別せしめる音的差異である、なぜなら意義をなうものはそれであるからだ」。このことが意味しているのは、記号のシニフィアンという側面が、他の記号とは関係なく自立的に或る意義を指し示しうるということではない。シニフィアンによってその記号は他の記号から区別され、またそこに見出だされるであろうシニフィエも、シニフィアンの差異化作用と同時に言語化以前の「不分明なかたまり」から対立的に切り取られることになる。記号に於ける意味内容的な側面であるシニフィエの確立の契機が、シニフィアンの差異のなかに見出だされるということである。したがって、言語のなかでは自立的な意義が体系を形成しているというのではなくて、この意義を生成するために差異を示すもののみが存在しているのである。

そこで、この言語の体系が自然的なものにも依存せず、論理的必然性をもっていないとすれば、シニフィアンによる差異化、それによって同時に惹き起こされる、未だ分節化されていない概念体というようなものからのシニフィエの切り取り、分節化というのも恣意的に、必然性をもたずに行われるであろう。そしてこの恣意的な、シニフィアンによる区分というのが、ラングという体系にとって、言語体系以前に既に分節化されている意味の世界や記号というものを予測させないようにするのである。このようにして、或る記号が「不分明なかたまり」のなかで、隣接する他の諸記号との関係によって、分節する範囲がどの程度まで及ぶのかということが、恣意的に決定されてくるのである。

言語記号という場所に於いては、その「意味」的な部分は、この記号間の恣意性のゆえに、或る記号が他の記号との関係のみによって決定されるような価値である、ということになるであろう。

このようにソシユールが言語をラング中心に考えたとき、我々の話している言葉の意味はどうなる

のであろうか。ソシュールの言語記号はその成立に於いて恣意的であり、偶発的な要因によって変更されるものである。しかし、話す時点に於いては、我々は一度定立した言語記号の価値のなかで話すしかないのである。ここで「語る」ということについて考えない場合、我々の言葉は、その時点で成立している各々の言語記号の価値、語義といったものをただ次々と運搬していくこととなるだろう。そしてあの「もどかしさ」が何であったのか結局わからないままになってしまいうだろう。我々は次にこの「語る」ということについて考えたいと思う。

言語表現と意味

我々はこのままで、我々の使用している言語が、体系に含まれている言語記号のレベルで、実体をもたないことを確認した。我々の言語の「意味」は、取り敢えずは、実体ではない、記号の価値という側面に基礎を置くことができる筈だ。

ところで、ソシュールは言語活動の研究に於いて、その歴史的な変遷ではなく、言語に於ける歴史という項目を一旦外に置いて、或る時代、或る瞬間に於ける静態的な言語体系の記述を行い、そこで始めて言語の構造を価値体系として考察できるとしている。しかし、我々がほんとうに考えようとしている「意味」は、以上のようなソシュールの言語研究によって、もたらされるのだろうか。

我々が実際に直面しているのは、「言葉」の「意味」である。そこにあるのは、我々の意識が手をつけられないでいる言語記号の価値だけではないはずだ。我々は確かにそこから出発するのではあるが、我々が「語る」ことによって、言葉が何か或る「意味」へと転化していくのではないだろうか。

メルロ・ポンティ(1908~1961)は、ソシュールを援用しながら、ソシュールが重視しなかった言

語のパロールという側面、「語る」ということに注目している。ソシユールにとっては、単にラングという制度に従って行われる、個人による発語程度のものでしかなかったものから、「語る」と自体の固有の明晰さ、表現の豊かさ」へとむかつていくのである。

言語記号が、その裏側に実体をもっていなかったように、メルロ・ポンティの考える言葉についてもまた、その前段階に既に完成した思想をもつものではない。ところが、このふたつは同様の仕方であるのではない。言語記号に於けるシニフィエは、我々話し手自身が手をつけられないところにながら、我々はそれを既に入手している。さらに、ここで手に入れている言語記号は、歴史のなかでは変化するとしても、「語る」その瞬間ごとに変化するものではない筈である。

しかしメルロ・ポンティのパロールにとっては、「語る」以前のその意味内容的なものが、実体ではないどころか、「語る」者自身がそれを入手することができないのである。「言葉は、言葉を語る者にとって、すでにでき上がっている思想を翻訳するものではなく、それを完成するものだ。」

我々の考えでは、言語の「意味」に接近するためには、ソシユールが行ったラングの解明だけでは不十分のように思われる。もしもラングのみを取り上げるとすれば、それはメルロ・ポンティが批判の対象とする「普遍的言語」に近づいてゆくように思われるからだ。それで十分であるとするならば、我々の言葉には「言おうと思うことが言われていることを超過したり、あるいは言われていることが言おうと思っていることを超過したりすることが全くなく、記号はいつでも、そのつど説明され残りなく正当化されうるはずのある思想の単なる略符でありつづけるのでなければならぬ」¹⁰。

ソシユールは、言語表現の意味については語ってはいないが、もしもパロールが上述のような機能、各記号を文として成立させるために繋ぎ合わせることにしかないならば、我々の求めている「意味」とは、或る表現に於いてそれを構成している個々の要素、諸記号が個別にもっている意味の総和が、

すぐさまその表現の「意味」ということになってしまふ。

しかし、メルロ・ポンティが考えているのは、「言語においては、意味は、諸記号の具体的な配置に結びつけられていながら、それらの背後で不思議な仕方で孵化されると同時に、それら諸記号の接ぎ目に滲み出て」来るということである。

このような仕方で「意味」を生み出しているメルロ・ポンティのパロールはどのようなものなのだろうか。

「言葉が全体としてはその一語一語によって語る以上のことを語りうる能力をもち、また言葉が、私は知っているが他人がまだ理解していないことへ他人を差し向ける場合であれ、私が理解しようとしていることへ私自身を赴かしめる場合であれ、言葉がおのれ自身を追い越していきうるといふ能力をもっている」¹²。

メルロ・ポンティにとって言語行為、パロールとは単に思想を表現に繋ぎ留めるために、言語の諸要素を結合していくものではない。私は話すことによって、自らの思惟を完成するのである。従ってその際には、私が表現したいと思っている事柄は、私が実際に行っている言語表現とは別物ではなくて、そこで用いられる語やその配置にしても、表現以前の思惟を想定していて、その思惟が表現を可能としている言語の構成要素と突き合わされて、選択、決定されたものではないだろう。「われわれ自身の言語表現は、われわれにとっては思考そのものなのである」¹³。

それでは言葉となり、思惟となる以前というのはどうなっているのであろうか。我々が言葉を話し始める以前には、その話そうとしている内容というものは未だ判然としないものであって、それは単なる志向にとどまり、「〈純粹〉思惟とは、けっきょく意識の或る空虚さ、瞬間的な祈念に帰着するほかはない」¹⁴のである。メルロ・ポンティはこの空虚でしかないような「意味的な志向」を表現へと

導く仕方について次のように言う。

「言語の或る〈言語的〉意味作用というものがあつて、それがまだ黙している私の志向と語とのあいだの媒介の役を果たしているものであり、その結果、私の言葉が私自身をおどろかしたり、私に私の思想を教えてくれたりもするほどである。」¹⁵

我々は言葉を話すときに、我々自身の思惟について話しているわけではなく、我々が話すのは思惟そのものなのである。そしてメルロ・ポンティのパロールというのは、「意味的な志向」を、具体的に一つ一つの語の意味作用を考えてみたり、言い回しについて表象してみることなしに、直接に表現へと導くのである。

メルロ・ポンティは「意味的な思考」について次のように語っている。

「たとえ次の段階では〈思想〉にまで結実してゆくはずだとしても、語によって充填さるべき、単なる規定された空虚でしかない。つまり、語られていることまたはすでに語られてしまったことにたいする、これから語ろうとしていることの余剰でしかないのだ。」¹⁶

我々のパロールによる表現は、言語表現となる以前には何であつたのか。表現に含まれる各語のことを一つ一つ考えてみてもその表現の意味は理解されないであろうし、各語の意味の総和が表現の意味というわけでもなく、表現は思惟がその担い手となつていて意味を表示するためのものではない。それどころか、表現は思惟を完成するように、そのために働くのであつて、意味そのものと別のものではないのである、ということは既に見てきたことであつた。そしてこのような表現以前にある意味的な志向というものは、結局意味とは呼びうるものではなくて、表現、意味へと向かいつつある「空虚」として規定される外はないであろう。この「空虚」というのは、我々が或る表現行為へと向かうとするそのときに、その表現によって充たされるであろう意味の欠如・欠損として、我々の心のう

ちにあったものであろう。我々のパロールは、この欠如を充足させる意味へと収斂していくように働くのであるが、ここで実現される表現というものは、内容と表示とが一義的に結合されて、ぴったりと重なりあう関係のような、全面的なものではない。

「どんな表現も決して絶対的表現ではないにもかかわらず、いやむしろまさにそうだからこそ、こういう言い方をする言葉^{バベル}や別の言い方をする言葉^{バベル}が存在し、より多くを述べる言葉^{バベル}やより少しを述べる言葉^{バベル}が存在するのだ。」¹⁷

メルロ・ポンティは、言語表現が全面的なものではなく、常に意味との関係において何らかのずれを生じていることについて、次のように言っている。

「意味されるものによる意味するものの乗りこえこそ表現の根本的事実であり、この乗りこえを可能にすることこそ意味するものの力働そのものだ、ということを確認よう。」¹⁸

以上のように、ソシユールとメルロ・ポンティについて眺めてみると、我々の言語は何かを語る際には、それを語り出す前に既に出来上がっているような意味内容を十全なかたちで言葉に置き換えているのではなく、常に独自の「意味」として発生していることがわかる。そのために、我々は自ら行った表現であっても、そこに或る「もどかしさ」のようなものを感じてしまうのではないだろうか。

ソシユールの言語記号に関する考察は、それまでの言語研究と比べると、実体を排し、言語の「価値」というものに迫ったという点で、当然評価すべきものであるが、言語表現の「意味」について考えるとき、それはメルロ・ポンティが批判した「普遍言語」にかなり近づいていくように思える。

我々が言語表現とその「意味」ととの関係を考えるためには、ソシユールの言語記号から出発しながらも、「語る」ということを中心に据えて考える必要があるだろう。

我々は「語る」ことによって、既定の意味しかもたなかった言語を、「所与の言語をすべて越えて」表現としての別の意味をもつように結実させるのである。

註

- 1 ソシユール（小林英夫訳）『一般言語学講義』p.158～159
ソシユールは言語学を記号学の一部門であるとしている。

- 2 同 p.96

「聴覚映像(image acoustique)」とは、実際の物理的音声のみを指すものではなく、感覚的な音声の心的刻印として我々に表象されるものである。ソシユールは始めこの語を使用したか、後にこれをシニフィアンという語に変更した。

- 3 同 p.106

- 4 同 p.108

- 5 同 p.33

- 6 同 p.157

- 7 同 p.168

- 8 同 p.165

- 9 メルロ・ポンティ（竹内芳郎、小木貞考訳）『知覚の現象学Ⅰ』p.293

- 10 メルロ・ポンティ（滝浦静雄、木田元訳）『世界の散文』p.19

- 11 同 p.162

- 12 同 p.173

- 13 メルロ・ポンティ（竹内芳郎他訳）『シー・ハー』p. 24
- 14 『知覚の現象学Ⅰ』p. 301
- 15 『シー・ハー』p. 139
- 16 同 p. 140～141
- 17 『世界の散文』p. 61
- 18 『シー・ハー』p. 141

〔参考文献〕

- F・ソシュール
『一般言語学講義』（小林英夫訳 岩波書店 1972）
- M・メルロ・ポンティ
『知覚の現象学Ⅰ』（竹内芳郎・小木貞考訳 みすず書房 1967）
『シー・ハー』（竹内芳郎他訳 みすず書房 1969）
『世界の散文』（滝浦静雄・木田元訳 みすず書房 1979）
- 丸山圭三郎
『ソシュールの思想』（岩波書店 1981）